

若者が参画した西口広場の活用案として、若者の発表の場をつくることが提案され、3月に実施することとして準備を行った。予定した期日は悪天候のために規模を縮小して実施した。

### ③ 「ゆったり夢街道」事業

「ゆったり夢街道」の構想については、5月に学生も参画してルートの概要の調査を行い、8月には地域住民と学生によるルートのバリアフリー調査と資源調査を実施した。バリアフリー調査では、車椅子を使用して高齢者が散策できるルートづくりについて取り組んだ。その結果を検討し、車椅子とセニアカーの導入を決定した。資源調査では、地元公民館の協力を得て、さまざまな文化、歴史、生活資源について詳細に調査を行い、資源マップを作成した。

これらの成果を踏まえて、まちづくり学習会において今後の事業について検討を行った。

成果の公表：「地域が若者を育て、若者が地域を育てる」生涯学習推進講座Ⅴ

長野県生涯学習センター 長野県生涯学習センター 2008年9月11日

「地域課題・時代の変化と公民館のあり方」長野県公民館大会基調報告

長野県公民館運営協議会 2008年10月2日

「新しい地域を若者と高齢者で拓こう」 ヤングとシニアのまちづくり研究会基調講演 信州ソフトウェア協会・松本大学 2008年3月5日

「大学教育におけるコミュニティ・ビジネスを通じた「地域における学び」の実践～「地域を壊す教育」から「地域を創る学び」への転換～」

『松本大学研究紀要 第7号』（通巻第59号） 2008年1月

『まちが変わる～若者が育ち、人が元気になる松本大学生がかかわった松本のまちづくり』 松本大学出版会 2008年3月

## 3. 新たな学習ニーズへの対応 「新規学習ニーズ対応プログラム支援」

日本私立学校振興・共済事業団

総合経営学部

尻無浜 博幸

・申 請・

プロジェクト名：地域福祉の担い手を養成する人材育成プログラム

期間：平成20年度4月～平成23年3月

目的：本事業は、社会福祉系の大学を無資格で卒業し福祉施設で働きたくとも働けない人、および他の職種から福祉関係の仕事への職種移行を希望する社会人などを対象に、地域の福祉を担う専門家である「社会福祉士」になるための学び直しのプログラムである。このプログラムは、社会福祉士の資格取得を目指すと同時に介護福祉制度を利用する家族へ適切なアドバイスができる広い視野を持った社会福祉士の育成を目的とし、地域の福祉リーダーとなるように教育する。

・報 告・

成果：まず「社会福祉士」になるための具体的な取組として、12月と1月に国家試験の直前対策講座を社会人など対象に地域に呼び掛けて行った。これは、資格取得者支援として職種

移行の促進と有資格者増強の目的で行った。参加者の評判はよかったが、開講日の設定には一工夫が必要であった。このような具体的な支援プログラムを地域内に提供することで、新規人材の開拓に繋がるし受講を通した横の関係の構築に寄与した。また、ただ合格を目指すだけではなく、学びの過程において地域福祉へのパラダイムシフトの動向やその必要性、参加者のその主体者であることを理解する機会になった。

成果の公表：シンポジウム開催

『「社会福祉士及び介護福祉士法」初・大改正にみる、若い福祉職・介護職の役割を探る。』（2009年3月26日・松本大学）

→コーディネーターとして、制度改正の資料等を用いて企画・進行を行う。

#### 4. 平成20年度 地域科学技術理解者増進活動推進事業 地域活動支援事業 (独) 科学技術振興機構

人間健康学部 健康栄養学科

廣田 直子・熊谷 晶子

・申請・

実施内容：「おいしい科学～“地域立大学”発 キッズ・ラボ～」

実施目的： 松本大学周辺の児童館・児童センターに通う子どもたちを対象に、松本大学の設備を利用して、身近な食べ物を用いた基本的な調理サイエンスを体験する調理実習・実験を行なう。

子どもたちが主役となった活動形態をとり、参加するこどもの自発的な気付き・発案・提案を体験実習・教育活動に最大限活かす企画とする。また、仲間や大学生のお兄さん・お姉さんとともに調理実験をする機会を提供する。大学で行なった実習・実験を家で再現するなど、家族と体験学習を共有してもらえる内容とし、実習・試食により発見・感動・学習したことなどを、家族や仲間と話す機会を設け、体験を振り返ってもらう。その手段として、実験・実習で作ったものや調理・加工前後を写真に収め、プリントアウトしてお土産とする。

最終的には、これらの写真や参加者の感想などを活動記録として冊子を作り、子どもたちが自らの経験・学習を将来振り返ることができる形でまとめる。本取り組みは、調理サイエンスに着目した体験学習を通して、参加する子どもたちが、“もっと知りたい”、“作ってみたい”、“食べてみたい”、“誰かに伝えたい”といった食に係るサイエンスへの興味・関心を深め、自分が理解したことを積極的に試してみようとする意欲を育むきっかけとなることをねらいとする。

・報告・

実施成果： 当初3回シリーズで実施予定であったが、2回シリーズとして実施した。当初、各回定員12名（参加児童）を予定していたが、初回は参加希望者が多かったことから、参加児童16名で、第2回は参加児童10名で実施した（うち、シリーズ2回とも参加した児童6名）。

シリーズ2回とも、引率いただいた児童センターの先生方からも「子どもたちにとってとてもいい経験・学習の場となった」と好評をいただいた。改善点等今後の課題はあがっているが、ふだん気に留めない“身近な科学”を、また、食べものを扱う際